



TITLE:

不確定性下における価値実現に向けた構想形成プロセス一定性研究から読み解く創発と計画の関係性一(Digest\_要約)

AUTHOR(S):

渡部, 暢

---

CITATION:

渡部, 暢. 不確定性下における価値実現に向けた構想形成プロセス一定性研究から読み解く創発と計画の関係性一. 京都大学, 2021, 博士(経済学)

ISSUE DATE:

2021-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22965>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2022-03-22に公開

## 学位論文の要約

本研究は、不確定性下において価値実現をめざした構想形成プロセスについて検討を行っている研究である。本研究はこの問題を解き明かしていく上で、特に創発と計画のメカニズムに焦点を当てているものとなっている。

本研究では、其々個別に不確定性の高い状況下にある製品開発に関する構想形成プロセス、新規事業創造に関する構想形成プロセス、創造性に関する構想形成プロセスについて検討し、これを共約することで不確定性下において価値実現をめざした構想形成プロセスを明らかにしている。いずれの題材も不確定性の高い状況下で価値実現に向けて構想を形成している点で、本研究の研究課題に合致した対象である。

本研究は、個別の文脈でそれぞれ適合的だと考えられたアプローチに基づいて研究課題の解明が試みられている。第3章・第4章では、主に準構造化形式のインタビューに基づいた事例研究によって研究課題の解明を試みている。また補完的なデータソースとして社内資料や公的なプレスリリース・雑誌・論文などを用い、整理した内容のチェックをインタビューや関わりの深い別の人物に受けることでデータのトライアングレーションを実施している。第5章はグラウンデッドセオリーアプローチに基づいた事例研究によって研究課題の解明を試みている。データは多数の二次資料を中心としている。分析においては客観性を担保するため、共同研究者間で議論を重ね、データと主観的解釈と客観的解釈との擦り合わせが行われている。

定性分析の結果として、本研究は主に以下の事柄について明らかにした。

まず、製品開発、新規事業創造、創造性のいずれの構想形成過程においても創発的な学習が繰り返されているという点である。

次に、何らかのガイドを活用することによって学習が方向づけられ構想が形成されているという点である。第3章・第4章では複数のニーズを踏まえた計画がガイドする手段として機能することによって繰り返し学習が方向づけられていることが確認されている。また第5章では、学習の事後に下される過去の経験や認知枠組みに基づいた評価がガイドとして機能することによって学習が方向づけられていることが確認されている。

最後に、構想は段階的に形成されるという点である。第3章・第4章においては、ガイドとして機能している複数のニーズを踏まえた計画が繰り返し学習を方向づけていくことによって構想が段階的に形成されているというプロセスが確認されている。また第5章においては集団による学習行為に対して適宜評価が下されて創造性を伴うデザインの構想が徐々に形成されていたことを確認した。

以上の分析結果を踏まえて、本研究は計画、経験、認知枠組みがガイドとして機能し、それが創発的な学習を繰り返し方向づけていくことによって不確定性下における価値実現に向けた構想を段階的に形成していくと結論付けている。こうした計画と創発の関係性が成り立つことによって不確定性下において価値実現に向けた構想が段階的に形成されてい

くのである。

本研究の貢献は以下のものである。まず、「構想と計画と行為の関係性」に関する一般的な議論に対する貢献である。「構想と計画と行為」は、一般的には、構想が形成された後に計画が策定され、その計画に基づいて意図や合理性に結び付いた行為が実行へと移されるという関係性に成り立つことが想定されてきた。だが本研究では、構想を形成していく過程の中で、簡易かつ暫定的な計画、あるいは、過去の経験や認知枠組みが組み込まれ、それが意図や合理性に結び付いた行為を導くという関係性が成り立っていることを示している。これは「構想と計画と行為の関係性」に関する一般的な議論に対して新規性の高い主張である。

さらに、経営戦略論に関する既存研究への理論的貢献である。これまでの経営戦略論に関する研究では、計画という概念が組織的な行動を統制するための「規格化されたマニュアル」であり、「行為に対する目的」であるかのように考えられてきた。だが、本研究では計画が「規格化されたマニュアル」や「行為に対する目的」であるだけでなく、「行為をガイドする手段」としての機能が備わっている可能性が高い事を示している。これは戦略論における一部の既存研究を補強する主張として貢献がある。

また、本研究は戦略論だけではなく、イノベーション論や組織学習論に関する既存研究に対する理論的貢献も果たしている。これまで多様な既存研究が、価値の実現には創発的な学習が重要であることを強調してきたが、創発的な学習をどのように方向づけていくことで価値を実現していくのかという問題に対しては明確な答えを用意していなかった。だが本研究は創発的な学習に計画や認知枠組み等を組み込んでいくことで価値実現に向けた構想が形成されていくことを示しており、これは戦略論、組織学習論、イノベーション研究への蓄積へと繋がっているものと考えている。

次に本研究は、既存理論において二項対立として議論されがちだった計画と創発、ニーズプルと技術プッシュが相互に影響を及ぼし合う可能性についても検討した点で貢献がある。これまで多くの既存研究が計画と創発の概念や、技術プッシュとニーズプルの概念を二元論的に捉えて、そのどちらか一方を強調する示唆を残してきた。だが本研究ではそれらの概念が相互に影響し合う事によって構想が形成され価値が実現されていくことを示している。これもまた多くの既存研究に対する学術的な蓄積となったと考えてよいだろう。

最後に、本研究の実務的貢献について述べる。これまで多様な研究が、創発的な学習の重要性を示しつつも、それをどうマネジメントすればよいのかという問題については議論を残したままであった。そのため創発的な学習をどのようにコントロールすればよいのかという問題が実務上の現場においても残されていたと考えられる。だが本研究はガイドとして機能する計画、過去の経験、認知枠組みをある特定のタイミングで複数回に渡り反映することで創発的な学習をマネジメント出来る事を示しており、この点において実務的な貢献がある。